

「思いやり」のパラドックス

— 文化比較をするということ

東京女子大学現代教養学部 教授
唐澤真弓 (からさわ まゆみ)

Profile—唐澤真弓

1985年、東京女子大学文理学部心理学科卒業。白百合女子大学文学部助手等を経て、1999年4月東京女子大学着任。博士（文学）。専門は文化心理学。著書は *Preschool in three cultures* (共著, The University of Chicago Press), *Oxford handbook of human development and culture* (共著, Oxford University Press), 『人間：いのちの歴史（小学館の図鑑NEO）』(共著, 小学館) など。



「Kawaii（かわいい）」。世界のメディアで日本語が流れてくる。心理学では「Amae（あまえ）」がその代表となろう。「甘え」が重要な概念であるからだが、それはまた適切な英語の言葉を見つけれないことにもよる。

1988年、初めての滞米生活で、文化と心の研究に魅せられて以来、多くの文化比較研究に携わってきた。道徳判断の研究にはじまり、子どもの学校でのパフォーマンスと原因帰属、自己形成のプロセスから感情制御、幸福感と健康の生涯発達の視点まで、多々な領域を文化比較という軸で探索し続けてきた。比較研究の醍醐味と苦労は多々経験したが、ある単語が英語の単語一つに訳しきれないこと、概念のずれがあることはいつも直面する課題である。日本では当たり前のように使われている「思いやり」も、そのひとつである。日本にとっての重要な発達課題である「思いやり」は、共感性や他者理解と解釈されてきたが、他者理解課題のひとつである「心の理論」課題の獲得は日本の子どもでは欧米の子どもよりも遅れていることが報告されている。

文化比較研究のおもしろさは、知っていたようで知らなかった問題を再発見し、説明していくところにある。東京女子大学の平林秀美さんと研究員の風間みどりさんと実施してきた子どもの感情制御についての日米中比較研究ではこの謎解きを試みた。「思いやり」について矛盾する事象を、文化心理学のアプローチからどう取り組んできたのかと、比較研究のおもしろさをここでお伝えできればと願う。

文化的課題としての思いやり

「思いやり」は日本文化を表す言葉として、幾多の研究によって指摘されてきた。レブラ (Lebra, 1976) は「思いやりとは、他者が感じている喜びや痛みといった感情を間接的に経験し、また他者を助けるために、言語的に明示されなくても他者の感じている気持ちを感じ、察する能力である」と指摘している。そして、関係志向性の強い日本においては、「思いやり」は重要な発達課題となっている。

「思いやり」スクリプトは日本の日常生活のいたるところで登場する。例えば、思いやりをもって他者の立場に立つことを示す語用法が日本語には存在する。母親が子どもにむかって自分のことをお母さんと呼んだりすること (鈴木, 1973) は、子どもの視点、相手の視点に立つことが慣習化した状態であるといえよう。また、「思いやり」には、自発的に他者の意図を理解すること、察する力が必要となる。日本では「あの人はいわないとわからない」と批判されることがあるが、アメリカ人に話すと「いわないとわからないのは当たり前で、いってもわからないことが問題なのではないか」と不思議がられる。日本では「いわれなくても自主的に行動する」ことが思いやりから派生した重要な行動形態となっているのである。日本人特有の概念と土居が指摘した「甘え」も、相手の好意や許容の期待といった、他者からの思いやりを前提とした状態であろう。

これまで私が関わってきた研究の中でも、「思いやり」は日本の準拠枠としてたくさん登場してきた。道徳判断の認知的方略についての

日米比較研究（東・唐澤, 1989）では、日本人はアメリカ人に比べ、そこには記述されていない文脈情報を読み取ることが示されている。「学生が先生をなぐった」という一文から道徳的な判断をする際に、「何か事情があったかもしれない」として、他者の気持ちや感情を推測し、他者の行動を許容的に判断する傾向がみられたのである。トビンら（Tobin et al., 2009）との日米中就学前教育の比較において、日本の特徴を一言で言い表したのも、「思いやり」であった。年長児が乳児のクラスを訪ねるプログラムがあったり、子どもの両親に、幼稚園の重要性は何かを尋ねると、80パーセント以上が幼児期から他者に共感すること、同情すること、理解することを学ばせたいと回答し、日本の親の期待が示されている。

教師にもこうした文化的課題に即した態度は散見される。日本の保育者は子どもの問題行動場面において、即座に介入しない方略を用いる（Tobin et al., 1989）。4歳児のクラスで、各自がお絵かきをしているなか、大声をあげたり、同じクラスの友だちの手を踏んだりといった「乱暴な」子どもに、保育者はすぐに言語的直接的に介入し、やめさせたり、たしなめたりしない。子ども同士で、いわれなくても、命令されなくても、問題解決するように期待され、促される。この保育者の方略は、18年後の縦断研究（Tobin et al., 2009）でも観察され、人形をめぐって取り合いのけんかをした後、実際に子どもが自分たちで仲直りをするという教師の期待に沿った「自主的問題解決」の場面もみられた。しかしこの方略は、他の文化の保育者には共有されなかった。保育者の責任を放棄したものであると強い批判を受けたのである。

Video-mediated-multi-vocal-ethnographyとよばれる方法で文化内外の反応を求めると、文化的課題の相違が浮かびあがってくる。日本の保育者が期待し、また優先したのは、いわれなくても問題を解決できる力であった。林ら（Hayashi & Tobin, 2015）はこれを「見守り」方略とし、風間ら（2013）は親にも共有されていることを示した。

「思いやりのパラドックス」

他者の心を推測し、その行動を理解する認知能力を測る「心の理論」課題に出会ったとき、文化心理学者としての素直な仮説は、「日本の子どもは心の理論課題がアメリカの子どもよりも早い年齢でできるようになるだろう」であった。日本の子どもは、「思いやり」スクリプトのあふれるなか、早い時期から他者の気持ちに配慮し、行動するような訓練を受けることになる。学習理論、強化理論から考えれば、「思いやり」刺激にたくさん触れることになり、日本の子どもは他者の心の動きをより早く理解できるようになると予測できる。

しかしながら、以後の文化比較研究から、むしろ逆の仮説が正しいことが示されてきている。日本の子どもが心の理論を確立するのは、欧米の子どもに比べて5ヵ月ほど遅いことが知られている（e.g., 子安, 1997; Naito & Koyama, 2006）。思いやりという他者理解の能力を、発達の早い時期からしつけられてきた日本の子どもが、自己の主張、自己選択に着目するしつけを受けた欧米の子どもより、他者を理解する発達課題に遅れる結果となっているのである。

さらに複雑なのは、この研究の対象となった子どもたちの親の質問紙では（風間ら, 2013）、子どもの心の理論得点と、親の見守りを肯定的にとらえる養育態度との間に負の相関がみられたことである。日米の親の養育態度を比較すると、子どもに対する言語的働きかけのなさ（Neglect Ignore）、つまり見守る態度が日本ではアメリカより多くなっているが、その態度を持つことが4歳児のレベルでの心の理論課題の成績をポジティブに促すとはいえなかった。

文化心理学の立場から、このパラドックスはどのように解釈したらよいのだろうか。幼少期より、繰り返しその重要性を唱えられ、また同様に次世代に伝えてきた「思いやり」は、他者理解を促進することにならなかったのであろうか。当然のように使っている概念が示すものは果たして何か、文化にある「思いやり」を育む方略を精査し、それが子どもの行動、認知、生理的脳神経レベルでどんなプロセスをたどって

いるのかを検討する必要があるだろう。

心の理論をめぐる

心の理論課題について、異なる実験課題や測度で多くの研究者が検討してきた。ウェルマンらはメタ分析を行い、子どもの心の理論課題発達をより詳細に捉える課題を作成した (Wellman et al., 2001; 2004)。この課題を用いて、東山 (2007) が日本のデータを収集し、発達の推移はほぼ同じになることを示した。われわれも同じ課題で検討した結果 (図1)、日本の子どもはアメリカ、中国の子どもに比べて通過率が低く、特に他者の誤信念を判断する課題 (Content False Belief) が低く、これまでの知見と一致する結果であった。他者の欲求水準に対しての到達は欧米と変わらないものの、他者の信念や他者の思いだとするともうも正答ができなくなるようである。

幼稚園での子どもの観察をしていると、日本の子どもは回答をひとつ選んだり、自分の意見を決めることが曖昧になることがよくある。たとえば、好きな色は何?と聞くと「全部」と答えたり、「みんなと同じ」と答える。アメリカではこんな場合、好きなものを選んで意見を明確にするように子どもをうながすが (Tobin et al, 1989)、日本では「同じなんだ」と教師に受け入れられる。よって、日本では親しい間柄ではお互いの気持ちはすでに共有されていると考えるため、他者の誤信念課題など、自分の考えとは異なる考えを他者に帰属させる必要のある課題では、成績が悪くなるのかもしれない。

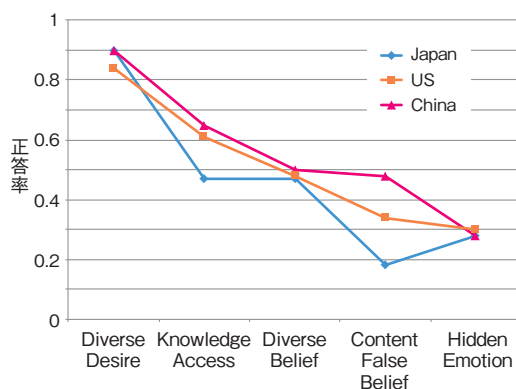


図1 日米中の就学前児の Wellman 課題の正答率

そこで、最近の研究では、実験課題の主人公に「知らないおじさん」と「おともだちの○○ちゃん」の二つを設定して日本人の子どもの誤信念課題での成績を検討した (Karasawa et al, 2015)。子どもにとって、見知らぬおじさん、つまり自分とは距離がある人についての回答のほうがやさしい傾向がみられた。他者が自分と共有することをよしとする可能性があるのかもしれない。こうしてみると日本の他者理解は、他者は自己と物理的に隔離されたものとして存在するというよりは、心理的な距離によって定義され、「思いやり」や共感をもつべき他者とそうでない他者とは区別されることとなるのかもしれない。

日本の子どもの他者理解

— 感情の理解と心の理論

日本における文化的課題は、子どもの社会性の発達にマイナスの影響となるのであろうか。先の心の理論課題の測定では、同時に感情制御場面での、コルティゾールの分泌量を測定した (詳細は平林, 2009参照)。ゲームが壊れたり、違うおもちゃをもらったりと子どもが感情制御を必要とする状況では、コルティゾール分泌による対処がみられる。この分泌量の予測因を検討してみると、興味深いことに、日本では、他者の感情理解課題の成績が有意になっているが、アメリカや中国ではこの傾向はみられなかった (Kazama et al., in preparation)。ここで用いられた感情理解課題は心の理論課題の他者の経験からの論理的推論に比べて、共感的・感情的な他者の理解を測ったものである。感情をコントロールするためには、日本の子どもで



図2 心の理論課題と感情理解課題で用いた画像

は心の理論より共感的な能力がより重要なのかかもしれない。

生理的反応や脳神経科学など、最新の交差的方法は、「思いやり」のパラドックスを文化的課題と子どもの行動、気質さらにはより深いレベルでの反応で分析することを可能とする。現在、われわれのプロジェクトでも、ウェルマンとポーマンが作成した「心の理論」のEEG測定課題を日本で実施したところである。複層的なレベルでの分析から、文化的課題である「思いやり」が子どもの自己形成にどのように関わっていくのかを明らかにしていくことが可能となろう。

文化比較をするということ

文化を比較すると、世界を単純化しすぎる、条件を簡略化しすぎるとよく指摘される。「思いやり」のパラドックスに出会うと、「思いやり」は子どもの心の理論獲得に役立っていないとか、日本の子どもは他者理解ができていないとか、親や教師の態度や「思いやり」の文化的課題がうまくいっていないといったふうに結論していると思われるかもしれない。しかし、文化を比較するという事はそう単純なことではない。文化心理学が志してきたのは、人間という種が、自分の生まれた文化に適応し、文化的課題を果たすことによって、生き抜く、というひとの主体的な営み、心の歩みを明らかにすることにある。文化間に共通なひとつの理論を想定するというよりは、複雑な要素が絡み合うなかで、適応的に自己を作っていくプロセスをみることである。個人の経験の総体を条件とするならば、そのひとつの記述の仕方が文化である。異なる経験をもつ個人を比較するために、文化はひとつの、パワフルな説明変数である。

近年の、学際的研究の流れは個人の経験の蓄積を遺伝子や脳神経科学レベルでの分析にも加えることができ、人間の適応プロセスにより深い知見を与えることを可能としている。文化を比較することは、「私」がどのように作られたか、まさに遺伝子情報一つひとつを読み解くように、社会的環境の要素を条件に仮説を立て、

実験し、調査し、積み上げていく過程にすぎない。ひとつの結論は、時に文化的ステレオタイプとよばれるかもしれないが、それが複層的に積み上がっていく繭のようになったら、「私」が作られた道のりをダイナミックに理解することができるだろう。その意味で、文化比較は人間の心のプロセスを知るために必須である。

文 献

- 東洋・唐澤真弓 (1989) 道徳的判断過程についての比較文化的研究：逐次明確化方略による試み. 『発達研究』5, 185-190.
- Hayashi, A. & Tobin, J. (2015) *Teaching embodied: Cultural practice in Japanese preschools*. University of Chicago Press.
- 平林秀美 (2009) 複雑系としての感情制御. 2009年度科学研究費報告書
- Karasawa, M., et al. (2015) Be happy to share with your friend's mind: Cultural differences in TOM task. Poster Session, Association of Psychological Science 27th Annual Convention.
- 風間みどり・他 (2013) 日本の母親のあいまいな養育態度と4歳の子どもの他者理解：日米比較からの検討. 『発達心理学研究』24, 126-138.
- Kazama, M., et al. (in preparation) Cultural differences in predictors of physiological responses in emotion regulation.
- 子安増生 (1997) 幼児の「心の理論」の発達：心の表象と写真の表象の比較. 『心理学評論』40, 97-109.
- Lebra, T. (1976) *Japanese patterns of behavior*. University of Hawaii Press.
- Naito, M. & Koyama, K. (2006) The development of false-belief understanding in Japanese children: Delay and difference? *International Journal of Behavioral Development*, 30, 290-304.
- Tobin, J., et al. (1989) *Preschool in three cultures*. Yale University Press
- Tobin, J., et al. (2009) *Preschool in three cultures, revisited*. University of Chicago Press.
- 東山薫 (2007) "心の理論"の多面性の発達：Wellman & Liu 尺度と誤答の分析. 『教育心理学研究』55, 359-369.
- Wellman, H. M., et al. (2001) Meta-analysis of theory-of-mind development: The truth about false belief. *Child Development*, 72, 655-684.
- Wellman, H. M. & Liu, D. (2004) Scaling of theory-of-mind tasks. *Child Development*, 75, 523-541.